

こほくとしょかん

江北図書館だより

〈発行〉 公益財団法人 江北図書館 令和2(2020)年4月1日 発行
〒529-0425 長浜市木之本町木之本1362 ☎・fax:0749-82-4867 第22号
ホームページ: kohokutoshokan.com/

開館時間 午前9:30～午後5:00(日曜日は午後2時まで) 休館日 毎週月曜と第1・3日曜、祝日

《特集》あります、こんな資料！

江北図書館文庫史資料紹介

滋賀大学経済学部士魂商才館所収

前号でもご紹介しましたが、本館所蔵の伊香郡役所や伊香郡誌編纂当時の史資料等、貴重な資料は、現在滋賀大学のご厚意により経済学部経済経営研究所の士魂商才館という建物に収められ大切に管理していただいています。地元の歴史や文化、産業など様々な分野に関する膨大な資料がありますが、今回はそのほんの一部を紹介します。

手続きを踏めば閲覧も可能です。今回の特集が、多くの方が江北図書館文庫に接するきっかけとなれば幸いです。

伊香郡役所資料より



『滋賀県物産誌 伊香郡』

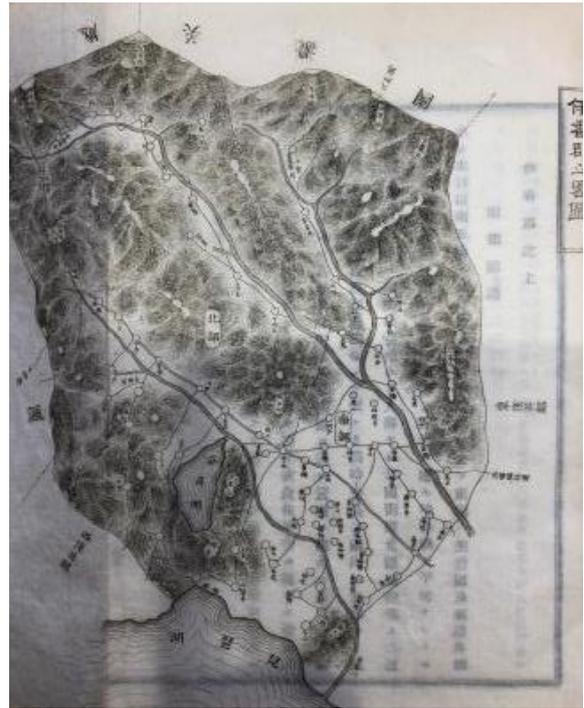
巻11上 巻11下

『滋賀県物産誌』は、60年前に、『滋賀県市町村沿革史』として活字化されている書物ではありますが、明治の編集当時には、合計34冊の和綴本だったようです。その『滋賀県物産誌』の中の11巻の上下2冊が、伊香郡役所資料の中にあります。『滋賀県物産誌』は、明治11年(1878)における滋賀県、1,395町村について、町村ごとに、位置や境域の概要、人口、戸数(農・工・商など)、地価、田地・桑畑・茶畑などの畑・宅地・山・林地の広さ、牛馬の頭数、船・荷車・水車の数まで詳しく記載されています。

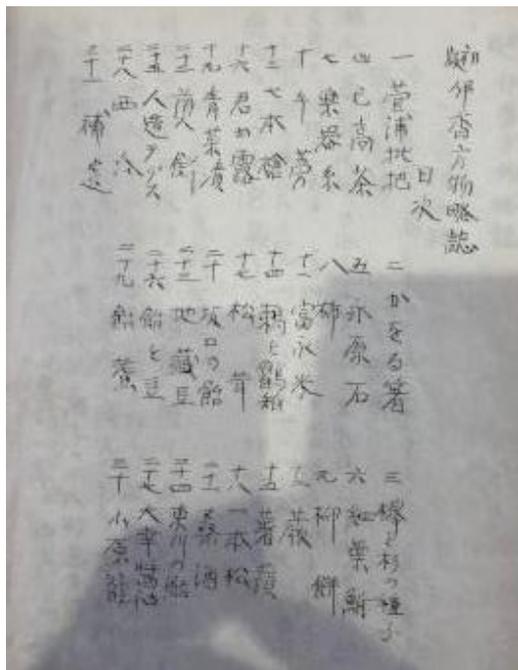
伊香郡の巻上には、52の村々、巻下には24の村々について書かれています。11巻上の目次の後には、右のような伊香郡全図が掲載されています。

地図からは、細かい村の名前までは読みにくいかとは思いますが、伊香郡の形が少し違うことにお気づきでしょうか。そう、この地図には西浅井がありません。明治11年当時は、まだ浅井郡の一部であり、伊香郡ではなかったのです。浅井郡が東浅井郡と西浅井郡に分かれるのは、明治12年。その後明治30年に制度改正により西浅井を含む全域が伊香郡となります。

各村の記載には、米以外に、麦・桑・茶などの収穫高が一覧に表され、不足分はどこから買っているか、余剰分はどこへ売っているかまでもが記されています。どこの村も桑の収穫高が多く、当時、養蚕がいかに重要な産業だったかがうかがえます。



『初版 伊香方物略誌』



この冊子は、大正12年12月20日に、伊香有信会という組織の同人誌として編まれたものです。手書きのガリ版刷りの中には、伊香郡内の自慢の物産、およそ30が紹介されています。

その序文には「本郡人文開けて既に二千余歳、由来川に、湖に、郷に名物少なからず・・・」とあり、それぞれの地域自慢の品々が並んでいます。

それらの中には、銘酒や菓子など、今も残る有名な商品名がいくつも見られますが、菅浦の枇杷(びわ)、高時の茶、永原の石、雨森の牛蒡(ごぼう)、富永の米、飯ノ浦の蕨(わらび)、中河内の鶉(つぐみ)、高野の西瓜(すいか)、塩津の飴煮、小原の籠(かご)など、各地域の自慢の名産を、それぞれのいわれを記しながらバランスよく紹介しています。

それらの中に、興味深いものに、「かをる箸」というものがありました。「近時世の需要激増せる趨勢に鑑み本郡副業組合の生産しつつある割箸は、名も香る箸と称し既に郡下の需要を満たして、京阪地方に移出しつつある盛況である。その材料を精選し、粗製乱造を戒め価格至廉なる三大特色を有するので販路ますます拓けゆく。装いは美的小袋と実質向徳用包み二種がある。」と紹介されているのですが、残念ながら「香る」の由来は詳らかにされていません。木の香りということでしょうか。良く売れた商品とのことですから、ぜひ実物を見てみたいものです。

当時人々はその時代の消費傾向などを敏感に感じ取りながら、商売に励んでいた姿が想像されます。こういった資料の中に、これからの地域おこしのヒントが隠れているのかもしれませんが。

1枚の写真から～関東災厄救援～

さて、伊香郡役所の資料の中には、災害関係のものも多くあります。その中から一枚の写真を紹介します。



写真の裏には、「災害義捐取扱所（惟馨館）前、大正12年9月10日午後3時撮収、関東地方大震災伊香郡救援品第二次発送状況」とあります。

関東大震災は9月1日に発生していることから、その10日後にはすでに第二次の救援物資発送が行われていたこととなります。情報や流通が困難だったことが推察される当時でも、迅速な災害救援が行われていたことに驚きを感じます。写真からは米俵以外の品物が何かは判別しがたいですが、屈強の男性達が協力して多くの物資を取りまとめている様子が伝わってくる一枚です。具体的な救援物資の資料や関東在住の郡民の安否を調査した資料も残されています。惟馨(いけい?)館がどういう建物かはわかりませんが、郡役所関係の一つと考えられます。

お願い 江北図書館文庫閲覧についてのお問い合わせは、

図書館までお願いいたします。閲覧には所定の手続きや一定の期間を要しますので、ご理解ご協力をお願い申し上げます。

伊香郡誌資料より

お地蔵さんの境内はこうだった！？

長祈山浄信寺境内全図

前述の『伊香方物略誌』には、伊香の名物として、「煎餅」を、「^{せんべい}地蔵煎餅は靈佛地蔵尊に因



(ちな)める格好の土産品であり、絹巻煎餅は清甘よく人の嗜好に適う。」と紹介しています。地蔵煎餅は今も残る土産物ですが、現在は見ることのない「地蔵豆」というものも挙げられており、「価格至廉なる地蔵豆は有名なる地蔵尊に因める名物である。地蔵院は開創茲(ここ)に千二百五十年、長寿眼疾に靈驗著しく、豊臣秀吉の建立した堂宇は往時の大火に灰燼となったけれど本尊に禍なく現存し、国宝である。参詣者常に絶えず、

殊に毎年八月二十三日より三日間の大法会は縁日と称して大いに賑わう。」と記されています。

煎餅、豆のいずれの紹介からも、木之本地蔵がずっと地域のシンボルであったことがわかります。伊香郡誌資料の中には、その「お地蔵さん」を祀った浄信寺の境内を描いた、模造紙半分くらいの大きさのフルカラーのポスターが収められています。残念ながら制作年月日などは不明ですが、印刷者は木之本町小森兵蔵とあります。

本堂や地蔵尊は勿論今と変わらない姿です。名勝の築山林泉式庭園も立派に描かれています。一方で、広い境内の奥には今は姿をとどめていない庵があったこともうかがえます。

関係者の方々に話を聞くと、観光用に大正期に作成されたものではないかということです。小森兵蔵氏は元々木之本町職員で、三役も務め、町会議員にもなられた方とのこと。印刷業を営まれていたことから、何れからかの注文により印刷したものと思われます。絵を描いたのが誰かはわかっていません。

同寺に関しては、他にも「浄信寺十九世雄山上人事暦」「浄信寺銘文筆者原稿」という資料もあります。

図面関係では他にも、伊香郡全体をはじめ各村々の地図、大箕山菅山寺の図、森崎山古墳の地図、芳洲書院平面図など興味深い資料が見受けられます。今後も積極的にひもといていきたいものです。

